

社会科

社会とのかかわりを実感を持って考えられる社会科授業

～子供が切実感を持って話し合い、学び合うことができる授業の展開～

今年度は、第1年次までの研究をさらに深めました。『社会科スクラップブック』をより充実した形で授業で活用するとともに、話し合い活動では「聞き合う」スタイルを推進しました。優先順位やランキングの手法を話し合い活動でうまく取り入れ子供たちの話し合いが切実なものになるように工夫しました。社会とのかかわりについても、その本質をもう一度考えてみることにした提案です。子供たちが真剣に悩み、考えていく姿をどうぞご覧ください。

(社会科主任 川口 英利)



1 研究の方向

第1年次は、副主題を「子供が切実感を持って取り組み、話し合える授業の構想」と設定し、子供たち自身が取材したことを生かす『社会科スクラップブック』の提案をして、研究を始めた。また、社会科としての話し合いの在り方を研究の大きな柱の一つとして「聴くこと」を重視し、概念を明確にする話し合いの方法を研究してきた。その結果、子供たち自身の取材を生かすことにより、授業に対してより主体的な態度が見られるようになったり、話し合いでは友達の見解をよく聴いて生かした内容を述べたりする姿が見られた。

研究2年次としてさらに内容を発展させていくために「実感を持って社会を考えている子供の姿」を1年次同様、次のように設定した。

ア 自分で調べたことと友達の見解を関連付け、自分と社会を結び付けて考えられる子供
イ 進んで問題意識を持ち続け、自分が社会とのかかわれる方法で表現する子供

今年度は、社会科の主題にある「実感」に込める授業の形として、より一層「子供たちによる主体的な話し合いや追究活動」を求める授業の展開を目指していきたい。そこで、副主題を「子供が切実感を持って話し合い、学び合うことができる授業の展開」とした。研究2年次の本年度も昨年度に引き続いて副主題に「切実感」というキーワードを掲げる。本校社会科部では「切実感」を、「社会とのかかわりを今まで以上に自分の身に差し迫ったものとしてとらえること」と考えていく。研究の中心は「話し合い」の在り方と『社会科スクラップブック』や『社会と生活かかわりブック』の活用をもとにした「社会とのかかわり」とする。「話し合い」の在り方については、1年次の研究成果を生かし、より子供たち主体の話し合い活動を研究していきたい。「聞き合う」ことを大切なテーマとして進めてきた昨年度の研究を踏まえ、今年度は次の段階を目指す。そして、友達との話し合いから追究した内容が深まり「学び合うことができる授業」を目指す。「社会とのかかわり」については、新たな視点を入れながら自分と社会とのかかわりを問題意識を持ち続けて考え、話し合いの成果を生かした学習活動も工夫していく。そのために、従来からの『社会と生活かかわりブック』や『社会科スクラップブック』を生かし、改善しながら社会とのかかわりを深める研究を進めていきたい。これらのことを踏まえた上で研究内容を次の2つの柱として位置付けた。

- (1) 社会的事象に対して切実感の持てる話し合いの構想と工夫
- (2) 社会とのかかわりを深める追究活動の工夫

(1)では、今年度の研究の中心に据えた話し合いにおける新たな構想とその工夫点について提案していく。(2)では、今までよりも社会とのかかわりを考えることができるようにする追究活動の工夫について述べていく。

2 研究の内容

(1) 社会的事象に対して切実感の持てる話し合いの構想と工夫

話し合いが切実になっていくには、子供たちが本気になって考えて発表したり反論したりする姿を大切に授業を設定することが重要である。そのために、子供たち自身の主体的な取り組みを生かす単元展開や学習活動を考えていくことにした。

ア 子供たちによる主体的な話し合い活動の在り方

本校の社会科では従来から、調べ学習をした後に子供たちが友達の意見を聴き、質問したり自分の考えや感想を言い合ったりしてきた。この話し合いからも子供たちは十分に互いの意見を尊重し、学び合うことができていた。ともすると教師主導による教師と発言者との受け答えで成立してきたと見られがちだった従来の授業形態を改善し、子供たち同士が発言をつなぐことのできる話し合いを実行したいのである。子供たちの話し合いが文字通り子供たち主体のものになると、今まで以上に社会的事象に対して「切実感」が得られると考えたのである。昨年度までの研究を十分に踏まえ「聴く」ことが先決であるという指導は引き続き継続し、その上で賛成か反対か、自分の意見との類似点、相違点はどこかを明確にした相互の発言を心掛けるように教師が助言し、話し合いに臨めるようにするのである。これは、発言したことに対して分からないことをたずねたり、聞き返したりする「訊き合う」ことができる話し合いである。この時、教師は子供たちの間に入って子供たちとともに意見のやり取りをし、話し合いの過程でわからないことをたずねたり、聞き返したりするスタイルが自然にできるように指導していく。但し、この話し合いの形は子供任せの放任主義とならないように、発達段階や学級の雰囲気、単元の学習内容を十分に考慮した形で進めていくようにする。時には、教師が必要に応じて介入して軌道修正したり、話題の方向性を変えたりすることが必要になることも考えられる。

イ 条件や優先順位を考え、意思決定を図る話し合い

社会科の学習内容・方法は、各学年や単元の内容によって様々なので、一律にこうすればよいという法則はない。しかし、切実な話し合いにするには、子供たち一人一人の社会的な思考力・判断力を試される内容設定が前提にあることが望ましい。社会科のこれまでの研究を振り返ると意思決定場面において従来の「○」か「×」や二者択一のような形式が多かった。しかし、これからの社会・次代を視野に入れた教育を考えると現実にはこの単純な構図では限界があると考えた。現実の社会に反映させれば、社会科の授業にも意思決定の形に複合的な思考を伴う要素を取り入れ、社会的な思考力・判断力を育成していく必要があると考えた。そこで、これからの意思決定の在り方としていくつかの条件を複合的に考えていくことやその条件の優

〈実践例：5学年『自動車づくりのひみつ』〉

自動車を作る組み立て工場の仕組みや関連工場について、一通り調べ学習と全体での確認が終了してから「これからの自動車づくり」のキーワードを学級全体で考えた。子供たちからは「安全性、環境、燃料、福祉、値段、夢のある車、デザイン」のキーワードが出た。そして、これらを自分が考える優先順位にランキングして全体の傾向を集計し、話し合いのきっかけとした。昨今の環境ブームから「地球環境に配慮したプランを推進すべき」とする意見が出たり、危険が伴う現実に目を向け「安全第一」を主張する意見が出たりして、話し合いでは子供たちの活発な意見のやり取りが見られた。意見の理由や根拠は明確になり、話し合い全体も噛み合った内容となった。

★ これからの自動車づくりのキーワードランキングをもとに話し合い		話し合い場のランキング	
順位	キーワード	順位	キーワード
1	安全性	1	安全性
2	環境	2	環境
3	夢のある車	3	夢のある車
4	性善	4	性善
5	デザイン	5	デザイン
6	値段	6	値段
7	燃料費	7	燃料費

話し合い場での発言内容

安全性... 命の危険が伴うから、安全第一で考えたい。また、事故防止のために、安全装置を付ける。また、燃費も大切で、燃費の少ない車がいい。また、デザインも大切で、カッコイイ車がいい。また、値段も大切で、安い車がいい。また、環境も大切で、地球環境に配慮した車がいい。また、夢のある車がいい。また、性善がいい。また、燃料費も大切で、安い方がいい。

先順位を考えていく方法を考えた。現実に近い状況や取捨選択を迫られる判断場面で子供一人一人が葛藤するような活動である。このような意思決定を図る話し合いを単元や学習活動に意図的に位置付けていくのである。この手法では、友達との話し合いやさらなる調べをもとにして考え、自分の考えをいつでも修正していくことができる。自分自身の考えの変容や気付きにあわせて意思決定をより望ましい方向へと変えることができるのである。また、場合によっては自分の考えのこだわりや自信をさらに強くすることも見込める。

このように、意思決定を図る話し合いを単元展開に組み込み、条件付きの優先順位やランキングを考える学習活動を設定することで、子供たちの話し合いの内容は噛み合ったものとなる。一人一人が理由についてじっくりと考えたり友達の発言をよく聴いたりして、その結果、聞き合うことができるようになる。そして、それをもとに子供たち主体の話し合いが進むことで、話し合い自体がより切実なものになっていくと考える。

(2) 社会とのかかわりを深める追究活動の工夫

社会とのかかわり方については、昨年度と同様、「社会で直接行動する」とか「実際にかかわらなければならない」と定義しない。学んだ社会的事象について自分の生活と比較し、自分の生活を振り返って意思表示をしたり、考えを深め判断したりした姿で認めていきたい。その上で、さらに追究を充実させたり、振り返りも次の追究活動に生かしたりして社会とのかかわりを深められるようにと次の2点を考えた。

ア 追究資料として『社会科スクラップブック』の活用充実を図る

昨年度から始めた『社会科スクラップブック』は、子供たちの社会科への主体的な学習態度を向上させてきた。それだけでなく、『社会科スクラップブック』の記事を積極的に授業で活用させていくことにより、授業での言葉のやりとりが、従来よりも自分の言葉になっていった。また、事前取材ができることにより、友達の収集した記事に対しても自分の意見を明確に持つことができるようになってきた。このように、子供たちは社会的事象について考えを深め、社会へのかかわりに実感を持てるようになってきたと考える。

今年度は、昨年度までの『社会科スクラップブック』から引用した子供の資料を授業で提示し、読み、それについて話し合うというプロセスに、もうワンステップ取り入れたい。具体的

〈子供のスクラップ作品例：5学年『輸出入額について』〉

日本の貿易の様子について学んだ後、タイミングよく掲載された新聞記事にコメントをつけて『社会科スクラップブック』として提出したものである。工業や貿易についての既習内容とリアルタイムで学習していた林業についての内容が結び付いた優れたコメント内容である。林業の単元の途中で紹介し、事前に提示していた「木材の輸出入量」のグラフを裏付ける資料となった。これまで研究を継続していた『社会科スクラップブック』の積み重ねがよりよく表れた姿だととらえた。このように子供たちが、『社会科スクラップブック』を作成し、授業に生かしていこうとする姿が多くなってきた。

輸出入額について...

今までの社会で学んだように、輸出、輸入ともに増加していることが分かる。

また、林業で勉強したように、木材は輸入しているので、木材のお値段が下がって、林業をやっている人が減っているという事につながります。

また、自動車などの機械を輸出する事が多い。2003年から増えていきました。(輸出)

2004年から増えていきました。(輸出)

でも輸出の件が多い。(輸入)

2006年度・県内企業

製造業の好調さ反映

には、提示した資料に対して自分が考えたこと・共通する意見・反論したいことを朱で書き入れたり、色違いのペンでチェックしたりする活動を取り入れるのである。今までは、せっかく子供たちから価値ある資料が上がってきたとしても、じっくり資料そのものに入り込んで取り組む活動を確保しなかった現状があった。これからは、全体で話し合う前に、じっくりと個人で資料を吟味する時間を設定し、資料をより大切に扱うようにするのである。迫力のあるよい資料をもとにさらに深める学習活動を確保することによって、子供たちがより社会的事象に対して切実感を高めていけるようにしていきたい。

また、1つの単元終了後にも、該当する『社会科スクラップブック』の収集を奨励し、全体で紹介するなどして授業後の学びが広がっていくようにしたい。このことで、単元終了後も実際の社会へのかかわりが深まり、実社会の時事問題を軸にした社会的なものの見方・考え方においても自立し継続した学びが期待できる。

イ 身近な小集団を生かす『社会と生活かかわりブック』の活用

社会とのかかわりを考えるにあたっては、様々なかかわりの在り方を工夫してきたが、今年度は、かかわる方向性と力点を工夫しかかわる対象を見つめてみたい。大きな実社会の中での子供の位置をとらえる以前に、子供たちにはもっと身近で様々な小集団でのかかわりがあるはずである。その身近な小集団に目を向けた実践を重ねることこそ、本当の意味での社会とかかわる姿が（かかわれない姿も）見出せるのではないかと考えたのである。

この考え方では、発信していくことに限定した活動に重点は置かない。単元によっては実社会への発信をしたいと子供たちから提案があれば実践すべきだが、まずは、身近な社会に足元からかかわることを重視して進めていきたい。それを授業で具現化できるのは、友達との学び合いであり、その後は、そこからスタートする子供たちの実践力や適応力に任せる生活レベルでのオープンエンドである。

具体的には、学んだことをもとに友達と話す時間を授業や単元の終末に設定する。例えば「〇〇を勉強して□□だったね。」といったような感想を述べ合うのである。そして、学んだことに対してメッセージがある時には「☆☆するといいよね。」と主張し合う。さらには概念を表す言葉で「※※とは？」と問いかけたり語ったりすることもあるだろう。このように、学習内容に合わせて授業の終末で友達とかかわる機会を設けるのである。この時に、授業ごとの終末に累積していた『社会と生活かかわりブック』を生かしながら友達と話し合うのである。この終末の身近な小集団での話し合いによるちょっとした気付きや実社会について考えることを『社会と生活かかわりブック』の記述に生かすよう促したい。

これらの活動には、社会科としての大切な内容面でのつながりをいつも意図したい。特に、発達段階に応じ、学びが次単元につながったり大きく単元を越えたりしていく投げかけができることも念頭に指導していく。そして、子供が自力では気付かないかもしれない大切な社会的な見方・考え方や社会とのかかわりの在り方を、身近な小集団である友達との話し合いの中から探り、導き出し、全体で次へとつなげていく指導を進めていきたいのである。ここでの振り返りが、次時以降のつながりのきっかけになり、子供たち同士によりよい学び合いになることを目指して指導していきたい。さらには、授業以外の別の時間や場所での言動や社会を見る目としての活用も期待して、この社会のとらえ方についても発達段階や単元に応じて子供たちに伝えていきたい。

3 研究の成果と課題

話し合いの在り方を工夫してきたことから、子供たちが話し合う姿勢や発言の真剣味が増し、社会的事象に対する切実感がずいぶん高まってきたと考えている。『社会科スクラップブック』の活用法についても充実してきたため、一層の定着が図れた。来年度は、また違った角度から話し合いの在り方を考えたい。また、新たに資料活用の工夫や改善も図り、実感を持って社会にかかわる子供たちの本質的な姿を3年間の研究の総まとめとして見出していきたい。